E. 自由記述

<分析の視点>

本項目は、難聴・言語障害教育の担当者がその現在及び将来について、日ごろ感じていることあるいは意見等を自由に書いてもらうために設けた。担当者の記述からは、日常の教育実践や保護者・教職員等関係者とのかかわりの中で担当者が抱えている悩みや課題、通級による指導が成立して10年ほどが経過したところでの制度に対する希望等がうかがえた。そこで、以下のような項立てのもとに、この教育が抱えている課題等が鮮明になるよう記述内容を列記することとした。その際、内容の重複を避けるとともに、文意を損なわない範囲で文言の整理を試みた。なお、()内の記号は、下記の集約対象校の分類を表している。

<集約対象> 総計 428学級

- A：小学校難聴学級
- B：小学校言語障害学級
- C：中学校難聴学級
- D：中学校言語障害学級
- E：小学校難聴通級指導教室
- F：小学校言語障害通級指導教室
- G：中学校難聴通級指導教室
- H：中学校言語障害通級指導教室
- I：幼稚園等のきこえやことばの教室
- J：小、中、難聴、言語、特学、通級等の併設

(1) 現状認識

- ・通級制という制度は、子どもの側に立ってみるととても効果的なシステムと考えている。(F)
- ・子どもや保護者の悩みに耳を傾け、一人一人を大切にする教育にやりがいを感じる。(I)
- ・通級指導教室は現在でもそうであるように、今後もセンター的役割を果たす割合が大きくなっていくと思う。地域はそれを期待している。(J)
- ・小学校内に幼児と小学生が通えることばの教室があるため、保育所や保健婦、福祉課、町教委と連携しやすい。(J)
- ・従来の言語障害は医療機関や療育センターの領域とし、学校教育ではLD児等へ対応するために通級指導教室を増やすことが必要と思われる。(F)
- ・言語障害児だけでなく、学級集団に適応できない子や授業についていけなくなった子どもなどの通級希望が増えている。しかし、こうした子どもがことば・きこえの教室に通うことが良い方法であるとは思えない場合もある。(F)
- ・担当者が何をしているのか分からないので避けようとしている職員、学校経営の補助をするのだと考えている職員等があり、通級による指導について真に理解されていないのが残念。(J)

(2) 指導内容・方法に関する課題

- ・教材開発が進み、音声は文字化されれば、子どもの学習に大いに役に立つと思う。(A)

- ・聴覚をよく活用している子でも、口話だけでは情報を受け取るのが難しいので、音声を認識して文字化し情報提供できる機器が開発されるとよい。手話も必要と思う。(A)
- ・発声・発語指導を進める上で、医学と科学の両面からの指導根拠が不足しているのではないかと感じる人が多い。(A)
- ・厳しいだけではいけないが、子どもの成長には身に付ける時期というものがあり、その時期を逸すると倍以上の時間と労力がかかる。発音や読話などに関しては、少々の厳しさをもって指導することも大切だと思う。(E)
- ・中学校では、学力をつけること、生活指導が大切であるし、高校入試のことも不安に思う。(C)
- ・中学校の校内通級として、特定の教科では取り出して個別指導をする。この点は生徒にとって利点である。そのため、難聴の生徒が一つの学校に集中することがある。それをどう考えればよいか。(G)
- ・5年生になり、「算数」と「理科」は交流学級で授業を受ける。その際、難聴学級の担任が付いて補助指導を行う。(A)
- ・高度難聴児の通常学級での情報保障が課題である。(G)
- ・難聴児の教育を考える場合、指導内容や就学先の選択の幅等を踏まえると、固定制と通級制の併設がふさわしい。また、センター校方式で難聴児の集団があることも重要である。(J)
- ・現在の指導においては、専門的な指導(構音指導、吃音指導)よりも、通常学級での支援や教科補充など、一般の教育領域の指導が増えている。(B)
- ・純粋な構音障害は別として、「ことばの指導」にはこれといったマニュアルがないし生活全般にかかわることだから、様々なアプローチがある分だけ、かえって指導が難しい。(F)
- ・来年度の週五日制実施に伴い、時間割の組立がますます難しくなってきた。特にグループ学習の時間が確保しにくい。(E)
- ・総合的な学習の時間の導入や各学校の変則的な時間割の作成等により、決まった曜日の決まった時間での通級が難しくなっている。(J)

(3) 研修に対する課題

- ・せめて1年ぐらい研修する機会があつて、その後専門職として配属されるようにならないものか。(F)
- ・親の悩みを聞き、親の心の負担を軽くするためには、幼児教育の専門としての立場も大切だと思う。「教室」の担任になる前に、2～3か月の研修の場が必要である。(I)
- ・LDやADHDの子どもに対応するための研修を義務づけてほしい。(F)
- ・今後ますます通常の学級では配慮の必要な子どもが増えていく。それに伴って、ことばの教室も多様なニーズに応えられる専門性が必要になる。(F)
- ・初任者の研修も大切だが、経験を積んだ者への研修も必要である。(I)
- ・町又は郡に一つしか教室がないので、言語障害教育担当の教師同士の交流ができない。定期的に研修できる機会がほしい。(F)

(4) 学級や教室の運営に対する課題(連携も含む)

- ・難言教育の専門性ととともに、校内の一職員として、生徒指導、児童理解、教材研究等の知識や働きが求められる。言語障害教育を中心としながらも、その責任をバランスよく

果たすことが、「校内に位置付いて機能することばの教室」となるコツであると考える。

(B)

- ・この仕事は、専門性ととも、連携の教育であるので学級担任への理解啓発が大切である。(F)
- ・通級担当者と学級担任の話し合う時間が取りにくい。中には、通級等への関心のうすい教員もいる。また、医療機関との連携も取りにくい。(F)
- ・子どもが在籍している学校を自由に訪問できるようなシステムを作る必要がある。(F)
- ・地域で教室の知名度が低いので、パンフレット等を作りアピールしたい。(F)
- ・難聴独自の親の会がないので、親同士、子ども同士の交流がうまくいっていない。(A)

(5) 学校経営や理解啓発に関する課題(人事異動も含む)

- ・学校経営上、教室の運営が管理職により異なるので、通級制度について管理職が学習できるシステムがあるといい。(B)
- ・ことばの教室が学校教育の中でどのようなことをするところなのか、皆さんにもっと理解してもらう必要がある。(B)
- ・毎年、担当者が3年単位程度で入れ替わる。専門職として認められるようになるといい。(F)
- ・校内人事で、担当する意志のない教員が配置される場合もある。専門性を重視してほしい。(F)
- ・担当者が短い期間で替わるため、どのような支援をすればよいのかよく分からないままに担当期間が終わってしまう傾向がある。(F)
- ・担当者の入れ替わりが激しく、通級指導を初めて経験する教員の数が増えている。経験者が担当できるようにしてほしい。(F)
- ・通級指導教室は学級ではないので、周囲の意識として最低レベルに扱われることがある。専門職としての地位を確立してほしい。(J)
- ・学校内でのバリアフリーに対する意識が十分ではない。特に難聴児については、いっから配慮してもらうことで、学習や学校生活で本人の理解できることが多くなると思われる。(E)
- ・側音化構音に対する家庭の理解が得られないケースが増えており、理解を深めるのに苦勞している。(F)
- ・学級数の増減や担当教員の入れ替わり等が、児童や保護者に不安を抱かせているのではないかという心配がある。(F)

(6) 制度に関する課題

①対象児

- ・幼児の通級が認められ、中学校にも通級指導教室が設置されれば一貫した教育が可能になる。(I)
- ・吃音等は卒業までに改善しにくいことや、ことばの遅れの子は中学に行っても援助が必要なことから、中学校にも言語障害通級指導教室が必要である。(J)
- ・中学校の通級指導教室については、その担当者が学校の中で果たす役割が大きい。少し違った立場で子どもを見る目をもっていること、また「教室」が「非日常」としての場であることなどから、人間関係に疲れている生徒にとっては居心地の良い空間になっているように思える。(H)

- ・言語障害教育の対象児は今後どうなっていくのか。LDやADHDの子どもは、どこで指導すればよいのか。(J)
- ・情緒障害通級指導教室がないため、LD児が言語の教室に通ってくる。LD児も通級の対象にしてほしい。(F)
- ・知的な遅れ、高機能自閉症、LD、ADHD、学級不適合などの子どもが通級してきている。そのための幅広い研修や行政的対応が必要である。(F)
- ・特殊学級在籍で言語指導を受けたい子のケースは、対象児として認めてほしい。(F)
- ・個別指導の必要な子が多いので、通級指導教室が各校に設置されるとよい。(F)
- ・コミュニケーションに問題のある子の指導に対するニーズが高まっている。障害の種類を越えて通級できる教室がすべての学校に設置されるとよい。(J)
- ・対象児の受け入れや指導内容は、担当者の裁量に委ねられている。そのため、学校によって、受け入れや指導の形態が異なる。質的に横並びする必要はないが、最小限の統一した基準や見解があればよいと思う。(F)
- ・年々、通級指導教室へのニーズは高まっているが、様々な児童が通級するようになり、通級指導教室は「なんでも屋」になりつつある。通級指導教室としての性格を打ち出すべきではないかと思う。(F)
- ・地域に発達センター的な相談機関や情緒障害学級が設置されると、ことばの教室のあり方(指導内容)が整理されると思う。(F)

②指導時間

- ・指導時間については、1人8時間が上限となっているが、進学を目指す生徒には、10～12時間が必要である。(G)
- ・通級してくるのに要する時間が1時間とか2時間かかるということは、すごく大変かつ無駄な時間だと思う。増級並びに巡回指導の導入等、予算面の整備が課題である。(J)
- ・午前中の時間割の空いているところを、幼児の時間として、ことばときこえの両方の子どもに対応しているが、これらの取り組みが認可外であることは残念である。(F)

③教員配置

- ・現在は児童9名で2学級あり、4学年にわたっているため2学年ずつ2人で担当しているが、来年は8人になり1人で4学年にわたる子どもを担当することになる。人数もだが、学年数も考慮して定員の枠を決める必要がある。(A)
- ・非常勤講師2名(週4日で1日当たり指導3時間、教材研究2時間)が配置されたが、今の通級指導の実態には合いにくい。(J)
- ・在籍制であれば1名でも教室が開設されるが、通級制度では10名程度いないと開設されない。開設されても担当者の配置基準が不透明で疑問が多すぎる。(B)
- ・通級による指導の定数が明確でないため、一人の担当者が20人を抱え込むこともある。(J)
- ・第7次の改善計画では、通級指導担当教員の加配枠がなくなり、開設が困難になった。(J)
- ・互いに相談したり研修したりできるように複数担当にしてほしい。(F)
- ・年度途中からの入級者が多く、年度当初の子どもの数とは異なる。指導のための順番が来るのを待ってもらっている状況で申し訳ない。指導者を複数にしてほしい。(F)
- ・担当者が加配という形のため、何年間続けられるのかその身分が不安定である。(F)

④予算や免許

- ・予算面でせめて固定（特殊学級）並みの措置をしてほしい。（F）
- ・専門性を確実にするため、研修を充実するとともに難言学級担任の免許を早急に実現させるとよい。（E）
- ・難言教育にかかわる教員免許が設定されるという話が出ているがどうなるのか。（J）

⑤「言語聴覚士」との関連

- ・S Tの資格ができたが、教育現場では、やはり教職経験のある人がことばの指導をした方が、広い視野で子どもをとらえることができる。（B）
- ・将来的に、言語障害児教育は学校で行われるべきなのか。教員は専門性が十分ではないので、むしろ言語聴覚士に治療していただいた方がいいのではないかと。（B）
- ・医療機関やS Tとの連携が大切である。通級指導教室へのS Tの配置若しくは定期的な派遣、担当者のS T資格の取得などが必要である。（J）
- ・今後は、言語聴覚士の通級指導への登用が進んでいくのか。（F）

⑥付き添い

- ・仕事があり送迎が難しい家庭が多く、巡回指導をしてほしいという要望がある。（F）
- ・保護者は、子どもの送迎を負担に感じたり、仕事をもっていたりするため、子どもに通級指導を受けさせることをあきらめるケースもある。（F）

(7)その他

- ・財政的に厳しい中、難聴児の指導の場については、幾つかの市町村や区が共同で運営できるようにするべきである。（G）
- ・地域のニーズに応えるため、担当者の勤務の位置付けを明確にした上で、巡回指導を促進してほしい。（J）
- ・通級指導教室の担当者は学校の職員であるが、その仕事は、行事との関係で学校全体の動きと合わない場合が多い。不登校の子を対象とする教室のように、通級指導教室は学校とは別組織のものになった方がよいと思う。（F）
- ・小学校の組織上、実態のつかみにくい「教室」という立場ではなく、独立したリソースルーム的な教室として運営されるべきである。（F）
- ・通級に対する幅広いニーズに応じていくようにするため、「個別学習支援教室」のように変えていくことも考慮すべきである。（J）
- ・専門の相談員をおいて、通級担当者を指導してほしい。（F）
- ・関係機関の連携を促したり、必要な情報を提供したりできるように、地域にコーディネーターが必要である。（F）
- ・難聴児が在籍する学校に難聴特殊学級が設置される。そのため、小規模学級が多くなる。それらのネットワークの中心的役割を聾学校が果たしてほしい。（A）
- ・将来的には、聾学校と通常の学校が同じ敷地内にあり、交流が密に行われるとよい。（C）